

■今月の特選句

2025年2月



雪が来るべたべた白をぬりに来る

森岡香代子

雪月花は日本の美の象徴であるから、美しく描かれ、賛美して詠まれるべきものである。それをこんな風に俗っぽい句にするとは実にけしからん。



少年の大志五十路の埋火か

北熊紀生

五十路となった今も、若い頃の大志は、まるで埋火のように健在であることに気付いたのだ。火箸でちょっと突つけば燃え上がる。ご用心を。



宝船枕の下で沈没す

久松久子

初夢に登場の宝船は願望であり可能性である。新年の幸福を願いながらいつの間にか寝落ちしたのだ。沈没とは情けない。七福神を救出せねば。



予定にはのんびりと書き初暦

加藤潤子

初暦の空欄に、いつもなら様々な予定を書き込むのだが、今年は違った。のんびりと英気を養うのもいいではないかと。ぼんやりもおすすめします。



年玉をスマホで送金詐欺のごと

井野ひろみ

お年玉は現金をポチ袋に入れて手渡すのが正しい渡し方であり貰い方でもある。遠方にいる場合は仕方ないか。なんとなく「オレオレ詐欺」気分。



一打ごと煩惱砕く除夜の鐘

門屋 定

百八もある煩惱を一つずつ収めて新年を迎えたい。強い煩惱はかなり力を入れて打たないと効果がないだろう。二つ三つ煩惱砕けず除夜の鐘。

■今月の秀逸句（・・・七七をつけてみました）

こむらがえり痛いなのの日脚伸び ・・・歩いて治さむ運動不足	大林和代
俳句とは言葉のパズル福笑 ・・・ちよつとズレてるくらいが楽し	谷本 宴
なにが胃ガンなにが大腸柿食むや ・・・柿が案外妙薬ならむ	沖枇杷夫
煩惱のうろうろしてる除夜の鐘 ・・・家へおいでと言うてみようか	井口夏子
咳すれば飴を呉れたる初句会 ・・・句敵なれど心のやさし	岡本やすし
ままごとの何でも買へる落葉かな ・・・使い放題落葉の紙幣	三木雅子
冬日和厨のやかんが熱唱す ・・・蓋を傾け白い湯気吐き	土屋泰山
ゆくりなく冬至の風呂で柚子合戦 ・・・昔懐かし大衆浴場	相原共良
己が為一番小さきポインセチア ・・・ささやかなれど吾にご褒美	池田奈美子
新年会忘年会と同じ店 ・・・幹事の手抜きかい店なのか	鈴鹿洋子
ハッチャケル大間鮪の初競は ・・・二億七百万円に化け	青木輝子
煤逃は厠でスマホを観るばかり ・・・閑居で不善を為してをります	伊藤浩睦
はや師走遺産相続未解決 ・・・持たざる者はうらやましくも	ほりもとちか

■今月の滑稽句

* 今月の特選句・秀逸句以外の佳句を青字で表示しています。

冬至風呂余命幾許かと柚子に聞く	相原共良
恙なし冬至の風呂に浸かりみて	相原共良
一年の喜怒哀楽の日記果つ	青木輝子
白息を吐いてアクセク勤労者	青木輝子
のど飴が奥歯いじめる師走かな	赤瀬川至安
クリスマス念仏唱えるおじいちゃん	赤瀬川至安
腰がだめ肩が痛いと煤払	赤瀬川至安
冬ざるる野にはなにやら光るもの	井口夏子
おがみけりメールの写真の初日の出	井口夏子
瞬きは亡き子のサイン冬の星	池田奈美子
潔く独りを生きん冬の月	池田奈美子
雁ご用心狂いミサイルのお出迎え	池田亮二
指一本ワンタッチで送る年賀状	池田亮二
掛乞の声は優しく猫だまし	伊藤浩睦
出稼ぎの外国人の真面目さよ	伊藤浩睦
去年今年途切れぬ会話のきりもなし	稲葉純子
松過ぎていつもの街の顔となり	稲葉純子
俎板にとんとんとんと齧打つ	稲葉純子
初詣酒の神様榊酒売り	井野ひろみ
初夢は軒と共に何処へやら	井野ひろみ
聞こえぬはずとマスクのひとり言	上山美穂
お隣は咳をする人新幹線	上山美穂
外は雪手にはベタつく醤油餅	上山美穂
老犬の白濁の眼に初明り	卯之町空
凧やベテルギウスを輝かす	卯之町空
インフルの猛威にできるか初仕事	卯之町空
乱世を仕切る絵踏や投票箱	遠藤真太郎
白髪葱箸の持ち方勉強す	遠藤真太郎
春スキー息をきらしてシニアコース	遠藤真太郎
水洩や病院はまず予約から	大林和代
初詣皆がもらへる齢ひとつ	大林和代

初景色羽柴本陣動きなし

音無しの音はしんしん初雪の

こがらしや木枯し紋次郎は育児中

雪女雪化粧して雪美人

たらふくの「ふく」は福なり新米の

初みくじ大吉と出てどうしよう

元旦や顔色娘に褒められて

賀状に混じる喪中葉書に手が止まる

恋猫の食後に飼主は用済みに

年用意済まぬうちから屠蘇を呑む

年用意放っておけと同期会

歌留多とりたちつてとつてとととと

鯛焼の餡はみ出して焦げるまで

近代史どんでん返し去年今年

からうじて御札頂く馬日かな

重ね餅プラか可燃か松明けぬ

三連休正月バテの初子さん

父と子が黙して歩く鹿の道

うたた寝の猫が落葉のお布団に

焼芋が間もなくできる落葉焚

演歌口遊ぶ年の瀬の散髪屋

吹き抜けの天窗にある小春かな

散らかしたティッシュのように山茶花山茶花

傾きしトタンにリズム初霰

若き日のセーター背中はどう映る

餅並ぶ一族総出の十三日

元日や仏間に囲む節料理

節料理亡夫の席はそのままだ

初詣いつもの神社に手を合はす

ポロ市で魔法のランプ見つけたり

百七で止めておきたき除夜の鐘

海外の便座冷たし跳びあがる

岡本やすし

岡本やすし

沖枇杷夫

沖枇杷夫

加藤潤子

加藤潤子

門屋 定

門屋 定

北熊紀生

木村 浩

木村 浩

工藤泰子

工藤泰子

工藤泰子

くるまや松五郎

くるまや松五郎

くるまや松五郎

黒田恵美子

黒田恵美子

黒田恵美子

桑田愛子

桑田愛子

桑田愛子

桜井美千

桜井美千

桜井美千

佐野萬里子

佐野萬里子

佐野萬里子

敷島鐵嶺

敷島鐵嶺

敷島鐵嶺

初場所や一山本といふ四股名
ある人が賀状じまひを言ひに来て
図書館に居る暖房費の節約
いっぱいの大物気取り懐手
暗黙の右肩上がりお年玉
煤逃は床屋の隅に将棋指す
姑に追われるように年明ける
羽ばたきの出来ぬ凍蝶窓灯り
戦車ゴロリ曾孫帰った砂場
犬に頼られている犬の歩き
膝の猫同んなじ雲追っていた
病巣の転移判明寒の入
八十四歳の冬チンパンジと横並び
風前の炎の日々や年用意
宜しくと句敵よりの賀状かな
初旅の荷物は多き山の神
消防車出番がなくて喜ばれ
凍窓に映る二人や腹鼓
着ぶくれて腹もふくれて仮寝かな
襦袢着て無手勝流の茶を君へ
老人の取り越し苦勞去年今年
冬帝や言行不一致てふ欺瞞
ドヤ街に生と死のあり日向ぼこ
借財の棒引きとなれ去年今年
金屏風誰も知らざり裏の闇
来客の帰りそびれし河豚の鍋
年始めよいこばかりが闊歩する
煤逃や今日水族館明日はカフェ
身体だけ未だ布団にとしがみつ
灰めかすのみの約束クリスマス
冬鷗差し出す菓子を見逃さず

上甲 彰
上甲 彰
上甲 彰
白井道義
白井道義
白井道義
鈴木和枝
鈴木和枝
鈴木和枝
鈴木和枝
高須賀溪山
高須賀溪山
高須賀溪山
高田敏男
高田敏男
高田敏男
田代輔八
田代輔八
田代輔八
田中 勇
田中 勇
田中 勇
田中やすあき
田中やすあき
田中やすあき
谷本 宴
谷本 宴
月城花風
月城花風
月城花風

駄々っ子のような降り方スコールは
屠蘇散をお酢に浸してしまひけり
獅子頭歯並び綺羅と衣着せぬ
禿頭に日影眩しき御慶かな
寒肥やとほき道まで馥郁と
老人の膝に似て鹿立ち上がる
しぐれては虹繰り返す翁の忌
藤棚を遊び尽くせる小鳥かな
股引をヒートテックといふ世かな
丸餅に埋まる生家でありし日も
湯豆腐や老いても角の取れぬ奴
また増えた年玉袋嬉しいね
茜射す雪の厚着の石鎚に
寒風の河の淀みに驚一羽
クリスマス父と張り込む午前二時
恋人はサンタクロースのバイトかな
おでん酒今年はワシが平和賞
ピーターパン潜んでゐさう寒木立
空と云ふ雨の遊び場田鶴渡る
肩で風切る若さのあり春著の娘
雲ゼロの初日にお城六千人
元旦よ四百日後に帰って来い
極寒でもまず一杯はビールなり
煤迷の仲間入りして病院に
田舎から送られし餅真空パック
去年今年まばたきのその瞬間に
初飛行誤変換され初非行
スタンプにスタンプ返し初LINE
木枯に負けてたまるかランドセル
ううむ齢を喰ったぜ初日の出
今年また空手で来たか福の神

土屋泰山
土屋泰山
百目鬼強
百目鬼強
百目鬼強
尚山和桜
尚山和桜
尚山和桜
長井多可志
長井多可志
長井多可志
長井知則
長井知則
長井知則
永井流運
永井流運
永井流運
西野周次
西野周次
西野周次
花岡直樹
花岡直樹
花岡直樹
久松久子
久松久子
日根野聖子
日根野聖子
日根野聖子
細川岩男
細川岩男
細川岩男

主宰なき句座もよろしや漱石忌
葱刻む昔のわたし今の吾れ
身体あちこちメンテナンスの十二月
初雪の便りに動く旅心
ひと先づは招き入れたり年賀客
大根を貰ひ寄り道ままならず
これしきの風邪にも負ける年となり
万歩計一万二千冬浅し
石露咲いて小雨の径を明るくす
解決は近しと御籤冬ざくら
藁製の長蛇の背に雪が載る
どこから来た屋根に雪乗せ対向車
路肩白しここから先は雪国です
相槌をただ打たさるる初電話
魚沼は米へ酒へと雪を積む
クリックしメモリ起せば初昔
バラ線に手袋一つ通学路 銭
篋(たかむら)も身を寄せ合いし寒さかな
綱を引く真白き犬よ冬の朝
ペコと消えポコと尻出すかいつぶり
竹馬の落ちかた言い訳のしかた
コーヒーに冬のうららをどうたらと
ひつぱりあいて勝負のつかぬ雑煮餅
除夜の鐘打つ人足りずいく度も
熊穴を出るてふ季語の恐ろしく
永き日のお日様次第に楕円形
イメージすれば佐保姫はおそらく細表
葉牡丹がサラダに見えて仕方ない
宿に来て知る伊勢海老は別オプション
大人しく成人式の祝辞聞く

ほりもとちか
ほりもとちか
松浦百重
松浦百重
松浦百重
三木雅子
三木雅子
水本明日香
水本明日香
水本明日香
南とんぼ
南とんぼ
南とんぼ
峰崎成規
峰崎成規
峰崎成規
明神正道
明神正道
明神正道
椋本望生
椋本望生
椋本望生
森岡香代子
森岡香代子
八木 健
八木 健
八木 健
八塚一青
八塚一青
八塚一青

手刀の殺生なき修羅歌留多とり
ぼたん雪雌松雄松は結び合ひ
隙間風臆病風を呼び込みし
俳人は零れると言う山茶花を
回覧板を隣家へ雪の壁つたい
寒怒濤山折谷折見惚れをり
寝正月気持ちも背中も丸くなり
売れ残り福を着せられ福袋
冬商戦ジャンボシャボンの類いなり
悴む手信号待ちつつグーパーグーパー
はがきからスマホに代り年賀状
冬晴や鴨の親子は立ち泳ぎ
裸木や服脱ぎ捨てて凍と立ち
デビューの日待ちかねてゐる冬木の芽
ステージは枯葉舞はせる大宇宙
父ひとり放つてはおけぬ三が日
花アロエ私も背すじ伸ばさうか
すみれティーとレースシュガー春を待つ
北風鈴鹿風の暴れ者
左心耳に蓋して生きる神の留守
減りしこと詫びつ賀状を注文す

柳 紅生
柳 紅生
柳 紅生
柳村光寛
柳村光寛
柳村光寛
山下正純
山下正純
山下正純
横山洋子
横山洋子
横山洋子
吉川正紀子
吉川正紀子
吉川正紀子
渡部美香
渡部美香
渡部美香
和田のり子
和田のり子
和田のり子